

第二十一回 涪関ふかんを取りて楊・高首こうしゅを授く、馬超ばちよう大いに葭萌関かぼうかんに戦う

— 劉備の入蜀 —

(前回から今回まで)

「赤壁の戦い」に破れた曹操は、その後国内の態勢を整え、再度、江南に侵攻する計画をたてます。しかしその前に、西方の脅威である関中の馬超・韓遂を除こうとします。そして、黄河と渭水流域で彼らと戦い、激戦の末に打ち破りました。

西方の脅威を取り除いた曹操は、再び呉の攻撃に向かいます。おりしも荊州を攻略しようとしていた孫権ですが、曹操が四十万の軍勢を動かして攻めてきたと聞き、荊州はいつたんあきらめて曹操との戦いに向かいます。ここに、曹操対孫権の「濡須口の戦い」が、長江と淮河間の一帯で始まります。

本文は省略しますが、「濡須口の戦い」の様子が詳しく描かれます。

曹操は四十万の大軍を率いて攻め下ります。そして、孫権軍の堂々たる布陣を眺め、「子を持つなら孫権のようでありたいな」と周囲に語ります。曹操は、呉があらかじめ築いていた濡須の砦が堅固なため、川を下って軍を進める事ができず、攻めあぐねて一月余りが過ぎ

てしまします。

孫権は曹操に手紙をだして、すぐに立ち去らないと赤壁の二の舞になりますよ、そして手紙の裏に、あなたが死なないと私は安心できませんと書き加えていました。曹操はそれを読むと、からからと笑って撤退していきます。孫権もまた帰っていきます。

曹操は孫権から、「赤壁の戦い」の二の舞になるよ、また、あなたが死なないと安心できないと言われて、怒ると思いきや、わが意を得たりと大笑いするのです。豪放磊落ごうほうらいらくな笑いで

それにしても、曹操は本当によく大笑いをします。しかもそれを、不利な場面で実によくやります。

かつて赤壁からの敗走途中で、この大笑いを二丁寧に三回もやっています。一回目は烏林うりんで趙雲に阻まれ、二回目は葫蘆口ころうこうで張飛に阻まれ、三回目は華容道かようどうで関羽に出くわす場面です。

『三国志演義』には、他にもからからと大笑いする人がよくいます。

吉永壮介氏によると、『三国志演義』登場人物のなかで三回以上笑う人物は三十二名、そのなかでも諸葛亮と曹操の笑いが「演義」全体の笑いの約三割を占めているとのことでした（『三国志演義』の「笑い」の位相について、「藝文研究」所収）。

でも、曹操の笑いと諸葛亮のそれとは、少しニュアンスが違うように思えます。向田邦子氏むこうだくにこがエッセイ「笑いと嗤わらい」で、目に見えるもの対して面白さを表現する笑いと、何かをコケにしてあげける笑いについて書かれていました。諸葛亮の笑いには、あなたのやろうとしていることはお見通しですよ、という後者の冷笑的れいせつてきかつ優越的な「嗤わらい」が圧倒的に多いように思います。もちろん曹操にも後者の笑いはありますが、窮地きゆうちにおちつたときの大笑いというのは、他の人物にはあまり見られないように思います。

「苦境の時にこそ、その人の真価がわかる」といわれますが、曹操には、逆境をも笑って受け入れるスケールの大きさを感じます。もちろん『三国志演義』の話で、史実での話ではありませんが。

さて、劉備は葭萌関かほうかんに駐屯したものの、戦うべき漢中の張魯ちやうろとは戦おうとせず、もっぱら領民の人心掌握じんしんしやうあくにつとめます。そして、孫権が曹操の侵攻を受けるや、その救援を口実に一万の兵士と軍需物資ぐんじゆぶつしの供出を劉璋に要求します。劉璋は、劉備のずうずうしさにあきれ、あまり役に立たない四千の老兵を送るにとどめます。劉備はこれに激怒します。

(本文抄)

劉備が激しく怒り、

「私はおまえ（劉璋）のために、力を尽くして敵を防いでやっているのに、おまえときたら、わずかなことにケチケチしおって。こんなもので、将兵に命がけで働かせることができるか」と、手紙を引き裂いて破り、大声で罵りながら奥に入ってしまったので、劉璋の使者は成都に逃げ帰った。

と、龐統は言った。

「殿はひたすら仁義を大切に出来て来られました、本日、手紙を破り、怒りをあらわにされましたから、これまでの劉璋との仲もすべて御破算になりましたな」

「だとすれば、どうしたらよいものか」と劉備。

「私に三つの計略があります。どうか殿ご自身でお選びください」と龐統。

「その三つの計略とは」と劉備。

「今すぐ精銳を選び、昼夜兼行で成都を急襲する。これが上計です。楊懐と高沛は蜀の名将であり、それぞれ軍勢を率いて要害を守備しております。今、殿が偽って荊州に帰るふりをされたなら、二将は必ず見送りに来ます。そのとき彼らを生け捕りにして、要害を奪い取り、まず涪城を攻略し、そのあと成都に攻め寄せます。これが中計です。白帝まで退き、夜どおし

かけて荊州に帰り、改めて蜀攻撃を図る。これが下計です。あれこれ迷ってここを立ち去らなければ、たいへんな事態に陥り、救いようがなくなりませう」と龐統。

「上計は性急すぎるし、下計は悠長すぎる。中計は遅からず早からずだから、それでいこう」と劉備。

そこで、劉璋に手紙をとどけ、孫権の加勢にいくから、挨拶をする間がないので、手紙でお別れの挨拶に代えるだけ言ってやった。

手紙が成都にとどき、劉備が荊州に帰ろうとしていると聞いた張松は、本心だと思い込んで手紙を書き、人をやって劉備にとどけさせようとした。

たまたまそこへ兄の広漢太守の張肅が来たので、張松は急いで手紙を袖のなかに隠し、張肅の相手をした。張肅は張松がそわそわしているのを見て、内心、変だと思った。

張松は酒を出して張肅といっしょに飲んだが、盃をやりとりしているうちに手紙が床に落ちたが、それに気がつかない。張肅の従者がこれを拾い、帰宅してから張肅にわたした。張肅が読んだところ、あらまし以下のように記されていた。

「私が以前、皇叔（劉備を指す）に進言したことは、けっして嘘偽りではありませんのに、なぜ実行されないのですか。」「逆取順守（原文）」（正しくない方法を取ったあとは、正

しい方法で天下を守ること）は、古人も尊重したやり方です。今、大事はすでに掌中しょうちゆうにあるのに、なぜこれを棄てて荊州に帰られるのですか。私は、呆然ほうぜん自失じしつしております。この手紙がとどきましたなら、すみやかに進撃をしてください。私が内応ないおういたしますから、くれぐれも時機を逸せられませんかように」

張肅は読みおわると、仰天して、

「弟はわが一門を滅ぼそうとしている。訴えないわけにはいかない」

その夜のうちに、手紙を劉璋に見せ、弟の張松が劉備と共謀して、蜀を劉備に献じようとしていると報告した。

劉璋は激怒して言った。

「日ごろからやつを大事にしてきたのに、恩を仇あだで返すとはこのことだ」

すぐに命令を下し、張松の家族全員を逮捕し、ことごとく首を刎はねさせた。

(解説)

『資治通鑑』しじつこう（徳田本『全訳資治通鑑』）『三國鼎立』電子版）では、次のように記します。

「そこで、劉備はわざと部下たちの怒りを煽あおった。『われらは益州のために強敵を討伐する

のだ。われら軍士が艱難辛苦かんなんしんくするのに、劉璋は財物を貯め込み賞金を惜しんでおる。これでは、どうやってわれら士大夫に命がけで働かせようというのか』

わざと怒りをぶつける劉備の姿は、まさに「勝負師」の面目躍如めんもくやくじよといったところです。

そして龐統は三つの献策をします。

① ひそかに昼夜兼行で成都を襲撃すれば、一回の行動で平定できる。これが最上の策。

② 荊州に危急の事態が起こっているからと帰還するふりし、涪水関に駐屯する劉璋の部将楊懷ようかいと高沛こうはいの軍を奪い、そこから成都に向かう。これが次善の策。

③ 撤退して荊州にゆつくりと帰りながら手段を講ずる、これが下策。

そして、このまま躊躇ちゆうじよして留まれば自滅します、即断即決せねばなりませんと劉備にいいます。

そして、劉備は①ではなく②の次善の策を採用します。

劉備が荊州に帰るとの情報に、張松は本当に劉備が蜀を去るものと誤解し、劉備を思いとどませようと手紙を書きます。しかし、張松の兄張肅ちやうしゆくは自分も巻き添えになるのを恐れ、劉璋に密告したので、張松は殺されてしまいました。

劉備は龐統の策にしたがい、白水関はくすいかんに駐屯していた楊懷ようかいと高沛こうはいを呼び出して斬り、進んで

ふすいかん
涪水関に無血入場します。そして、将兵を慰勞する宴会を催します。

(本文抄)

すっかり酔ってしまった劉備は、龐統に向かつて言った。

「楽しいことだ、今日の宴会は」

「他人の国に攻め込んで楽しむのは、仁義を重んじるものがすることではありません」と龐統。

「昔、周の武王が殷の紂王ちゆうおうを討伐したとき、音楽を演奏して功績を表したというが、それも仁義にはずれるというのか。きみの言葉は道理にはずれている。さっさと出て行け」と劉備。龐統はからからと笑いながら席を立った。

劉備も左右の者に扶たすけられて奥座敷に入ったが、夜中まで眠り、酒がさめたところで、左右の者が龐統がいった言葉を告げたところ、劉備は大いに後悔こうかいした。

翌朝、劉備は衣服をきちんとつけて正堂に出ると、龐統に詫わびて言った。

「昨日は酔っぱらい、無礼なことを言ってしまったが、どうか気にしないでもらいたい」

龐統は話も聞かずに笑っているので、劉備が「昨日は、私がまちがっていた」と言うのと、

龐統は言った。

「君臣ともにまちがっておりました。殿だけではありません」

それを聞いて、劉備もまた大笑いした。

(解説)

手際よく涪水関を無血占領して喜んだ劉備は、慰労の宴会をおこないません。その時の模様は『三国志』龐統伝に記述があり、『三国志演義』はそれをもとにしていますが、細部はわずかに違います。『三国志』では、以下の通りです。

劉備は龐統に、今日の集まりは大へん楽しいではないか、と語りかけ、それに対して龐統は、他人の国を討つて楽しいとは、仁者の兵ではありません、と答えます。劉備は、周の武王が殷の紂王を討伐したのは仁者の兵ではないのかといい、腹を立てて龐統を退席させます。しかし、すぐに後悔して呼び戻します。戻った龐統は、謝りもせず飲み食いを持しました。劉備が、先ほどの議論はどちらが間違っていたのかと訊ねると、龐統は「君臣ともどもでした」と答えます。

劉備に蜀を奪うよう勧めたのは龐統でしたが、彼はそれが道義に外れたことだとわかって

いたのです。

この後、劉璋は次々と部将を派遣して劉備軍を防がせますが、みな打ち破られ、劉備軍は綿竹めんちくまで進出します。劉璋の武將吳懿ごい・李嚴りげん・費觀ひかんらはみな、自分の部隊を率いて投降します。そこで劉璋軍は、雒城らくじょうで守りを固めます。

そこで、龐統は二手に別れて雒城へ向かうことを進言します。

(本文抄)

その日、兵士は五更（午前三時から午前五時の間）に食事をとり、夜が明けると同時に出陣することになった。

劉備は龐統と再会の約束をしていたとき、突然、龐統の乗った馬が何かに驚いて棒立ちぼうたちになり、龐統をふりおとした。劉備は馬から飛び下り、その馬を抑えながら言った。

「軍師、どうしてこんな悪い馬に乗っているのか」

「長らくこの馬に乗っていますが、こんなことは初めてです」と龐統。

劉備は、「私の乗っている白馬は、よく人に馴なれているので、これに乗れば、万に一つもまちがいがいい。その悪い馬は私が乗ることにしよう」と言い、龐統と馬を交換した。

龐統は感謝して言った。

「殿のご厚恩こうおん、ありがとうございます。たとえ死んでも忘れません」

かくしてそれぞれ馬に乗り、二手に別れて進撃した。劉備は龐統が去って行くのを見て、内心はなはだ不安を感じ、鬱々うつうつとして軍を進めたのであった。

さて、雒城らくじょうを守る呉懿ごいらが協議したところ、張任ちやうじんが言うには、「城の東南にある山に細い道がある。これがもつともかんじんだから、私が軍勢を率いて守備しよう。諸君は雒城を堅く守るようにもらいたい」

そこに、劉備軍が二手に別れて雒城に攻め寄せたと知らせが入ったので、張任は急いで三千の軍勢を率い、細い道に潜伏した。

魏延ぎえんの軍勢がやって来ると、張任はそのまま通過させ、気づかれないようにした。ついで龐統の軍勢がやって来たとき、張任軍の兵が白馬に乗った敵の大將を指さし、「あれこそ劉備に違いありません」と言った。

一方、龐統がふと上を見ると、両方から山が迫り、夏の終わり秋の初めのこととて、枝葉が鬱蒼うつそうと茂っている。

龐統は胸騒むなさわぎをおぼえ、馬を止めて、「ここは何といふところか」とたずねた。

と、降伏したばかりの兵士が、「ここは落鳳坡らくほうはというところですよ」と言った。龐統は驚いて、「私の道号どうごう（道士の号）は鳳雛ほうすうだ。ここを落鳳坡らくほうはというのは、不吉ふきつな名だ」と、軍勢を後退させようとした。

そのとき、石火矢いしびやの音がしたかと思うと、矢が蝗いなこのように白馬に乗っている者めがけて射かけられた。こうして、龐統は雨のような矢のなかで落命したのだった。ときにわずかに三十六歳であった。

(解説)

龐統は、この雒城の戦いで戦死してしまいます。それは、劉備が貸し与えた白馬に龐統が乗っていたため、劉備と間違えた伏兵によつて射殺されたからです。その場所は、「落鳳坡」というところでした。龐統は「鳳雛」と称されていたので、「落鳳」というのは龐統にとつて不吉な地名だったのです。このあと雒城の攻防戦は二年の長きにわたります。劉璋の部下の李嚴・費觀らが降伏する一方、劉璋の子劉禪りゅうしゆんと部将の張任は、雒城を守つて頑強に抵抗します。

ここから、劉備は一転して大苦戦におちいります。劉備は、荊州の諸葛亮に龐統の死を伝

え、諸葛亮の援軍を仰ぎます。

諸葛亮は趙雲に先鋒を命じ、みずから軍勢を率いて蜀に向かいます。その一方で、張飛には陸路雒城らくじょうへ向けて進発させ、二手に分かれて雒城で合流する手はずにします。

張飛は、降伏した者を痛めつけてはいけなとの諸葛亮の指示を守りながら、順調に巴郡はぐんに到着します。巴郡を守っていたのは劉璋の部将の嚴顔げんがんです。

劉璋の部将には戦わずして劉備に降つたものも多くいましたが、それを潔いさぎよしとせず頑強に抵抗する部将もありました。それが、劉備軍が苦戦した理由なのですが、嚴顔もその一人でした。

嚴顔は激戦の末に捕らえられて、張飛のもとに引き出されます。ここで張飛は、いつもの「がさつで怒りつぽい張飛」とは一味違った対応をします。

張飛は最初こそ、激しく抵抗した嚴顔に怒り狂っていましたが、嚴顔の堂々とした姿を見て感じ入り、自分でその縄を解き、自分の上衣を彼に着せかけて非礼ひれいをわびます。ここで嚴顔は、張飛の恩情おんじょうに感じ入って降伏します。そして、嚴顔が先々の劉璋側の部将を説得して帰服させたので、張飛は戦わずして雒城まで快進撃し、諸葛亮を驚かせます（「張翼徳ちやうよくとく、義もて嚴顔げんがんを釈ゆるす」）。

一方、劉備も雒城に向かいます。雒城を守るのは、劉璋の子劉禪と部將の張任・呉懿でした。ここで劉備は西からやってきた張飛と合流しますが、張任らの激しい抵抗に遭遇します。そこへ、長江を遡さかのぼって諸葛亮と趙雲が到着します。諸葛亮は策をめぐらして張任をとらえ、重要な軍事拠点であった雒城を攻略することに成功します。建安十九年（二一四年）のことです。劉禪は成都に退き、呉懿は降伏します。

張任は最後まで戦いぬぎ、「忠臣は二君に仕えないものだ」と降伏を肯がえんぜず死んでいきます（「孔明計を定めて張任を捉とらう」）。

雒城を落とした劉備は、成都へ向かって進撃を開始します。

一旦話は変わり、関中で曹操に敗れた馬超は涼州に逃亡しましたが、そこも追われて漢中の張魯のもとに身を寄せます。

ちやうどその頃、劉備の攻撃に迫られた劉璋は、張魯に領土の割譲を条件に救援を求めます。そこで張魯は、馬超を救援に送ります。馬超は北から葭萌関に攻め寄せます。

劉備はこの知らせを聞いて驚きますが、諸葛亮は関羽を引き合いに出して張飛の気持ちを奮みなぎり立たせ、葭萌関に向かわせます。張飛は、馬超何するものぞとばかり、闘志を漲みなぎらせて馬超と戦います。馬超と張飛が、無数の松明に照らされながら一騎打ちをする名場面です。

(本文抄)

翌日、夜明けになると、関所の下で軍鼓ぐんこが鳴り響き、馬超の軍勢が押し寄せた。劉備が関所の上から眺めていると、門旗のかげから、馬超が馬を飛ばし鎗を手にして現れた。獅子ししのかぶとに猛獸をあしらった帯、銀の鎧よろいに白い戦袍を身につけている。一つにはその非凡ひびんないでたちに、二つにはそのずば抜けた風格に、劉備は感嘆しながら言った。

「人は『錦にしきの馬超』と言うが、なるほど評判どおりだ」

張飛は鎗をかまえながら馬を出し、大声で呼ばわった。

「燕人えんひと張飛を知らんのか」

「わが一門は先祖代々の名家だ。田舎者の下郎げろうの名など知るものか」

張飛はカンカンに腹を立て、両馬がいつせいに前へ進み、二本の鎗が同時にふりあげられ、百合余り戦ったが、どちらも引かない。

劉備はこれを見て「あっぱれな虎将こしょうだ」と嘆息し、張飛の身を心配して、急いで銅鑼どらを鳴らし軍勢を引きあげさせた。張飛と馬超はそれぞれ自陣に帰った。

張飛は自陣にもどり一息入れると、かぶともつけず、頭巾をかぶっただけで馬に乗り込み、

再び出陣して馬超に戦いを挑んだ。馬超も出陣し、両者はふたたび戦いを交えた。劉備は張飛の身を案じて、鎧かぶとに身を固めて関所から下り、みずから陣の前に立ったところ、見れば、張飛と馬超はまたも百合以上戦ったにもかかわらず、ますます元氣潑刺げんきはつらつとしてゐる。

劉備は銅鑼どらを鳴らして軍勢を引きあげさせ、張飛と馬超もそれぞれ自陣にもどった。

この日、日が暮れると、劉備は張飛に言った。

「馬超はなかなかの武勇の持ち主だから、軽く見てはならない。いったん退却して関所に引きあげ、明日また戦え」

頭に血が上った張飛が聞くわけもなく、大声で「死んでももどらんぞ」と叫ぶ。

「今日は暗くなったから、戦うことはできない」と劉備。

「松明をたくさん燃やし、夜戦をやるう」と張飛。

馬超もまた馬を交換すると、ふたたび陣の前に出て来て、大声で叫んだ。

「こら、張飛よ、夜戦をするか」

張飛はいきり立ち、劉備の馬と換えてもらい、急いで出陣すると、「わしはおまえを捕まえないかぎり、誓って関所にもどらんぞ」と叫んだ。

「私もおまえに勝たないかぎり、誓って陣営にはもどらんぞ」と馬超。

兩軍からどつと鬨の聲が沸きおこり、無数の松明たまつに火が灯され、真昼のような明るさになった。張飛と馬超はまたも陣の前に出て火花を散らして戦った。二十合余り戦ったところで、馬超は急に馬首をめぐらし逃げ出した。張飛は大声で叫んだ。

「逃げるな、馬超」

馬超はひそかに一計を案じ、負けたふりをして張飛をおびき出し、隠しもった銅鎚どうつひ（鎚は敵に投げつける武器）を手にすると、身をひねって張飛に投げつけた。張飛は馬超が逃げたのを見て、内心用心していたので、銅鎚が投げられるや身をかわした。銅鎚は耳の横をかすめただけだった。

張飛が馬首をめぐらしたところ、今度は馬超が追ってきたので、張飛は馬を止めると、弓をに矢をつがえて、ふりむきさま馬超めがけて放ったが、馬超もまたこれかわした。かくして二人はそれぞれ自陣にもどった。

（解説）

馬超は『三国志演義』では、輝くような勇将として描かれます。

今回は「獅子のかぶと（盔かい）に猛獸をあしらった帯、銀の鎧よろい（甲こう）に白い戦袍を身につけ

ている。一つにはその非凡ないでたちに、二つにはそのずば抜けた風格（原文「獅盤獸帶、銀甲白袍、一來結束非凡、二者人才出衆」）と描かれ、前の「馬孟起兵を興して恨みを雪ぐ」では、「白粉をはいたような顔、紅をさしたような唇、腰は細く肩幅は広く、声は雄々しく、力にあふれ勇猛そのものだった。馬超は白い戦袍に銀の鎧、手に長い鎗を持ち、陣頭に馬を立てた（原文「面如傅粉、唇若抹硃、腰細膀寬、聲雄力猛、白袍銀鎧、手執長鎗、立馬陣前」）と記述されます。

『三国志演義』での馬超の初登場は十七歳のときですが、それ以来、その輝くばかりの武者ぶりを全く変わっていません。「錦の馬超」といわれる所以です。

劉備は、この馬超をなんとか自分の陣営に取り込みたいと考えます。そしていつも通り、諸葛亮が策をめぐらします。

諸葛亮は、張魯の側近の楊松に賄賂をおくる一方で、張魯にも漢中の王として朝廷に推薦すると持ちかけ、それと引き換えに、馬超を漢中から呼び戻すように仕向けます。張魯は楊松に説得されて、馬超に撤退を命じます。しかし馬超は、まだ勝利を得ていないからと撤退を承知しません。

そこで楊松は、馬超が撤退を承知しないのは、彼が野心を持っているからだと言張魯に吹き

込みます。

張魯は楊松ざんげんの讒言を信じ、引き上げないのならと馬超に三条件を課します。それは、一か月以内に蜀を奪い取る、劉璋の首を取る、劉備を荊州に追い払うというものでした。

馬超は仕方なく撤退しようと思いますが、今度は、楊松が馬超の撤退は裏切るためだとデマを流したので、馬超はどうとう進退しんたいがきわまつてしまいます。

そうしておいて、諸葛亮は、李恢りかいを馬超のところ差し向けて帰順きじゆんさせることに成功します。かくして馬超が劉備陣営に加わります。

以上は『三国志演義』での話ですが、史実では次のように簡潔に記述するだけです。

『三国志』馬超伝には、「張魯はともに事を計るに足らぬ人物だったので、内心いらだちを覚え、先主が成都にいる劉璋を包圍ほうゐしたと聞くや、密書みつしょを送って降伏を願ひ出た」と。そして同じく李恢りかい伝には「李恢は劉璋の敗北、先主の成功まぢがいなしと判断したので、郡の使者という名目をつかい、北方の先主のもとへ出向き、緜竹めんちくで出会った。先主はそれを嘉よみし、随行させて雒城らくじょうに到着すると、彼を漢中に派遣して馬超を味方に引き入れさせた」と。

『三国志演義』は、これだけの記述に脚色を加え、名場面に仕上げます。

劉備はあらたに馬超を幕下に加えると、ふたたび成都せいとの攻撃に向かいます。

攻撃軍の中に、馬超がいるのを見つけた劉璋は、驚愕きょうがくのあまり気絶きせつしてしまいます。それほど馬超の勇名はとどろいていたのです。劉璋は、城内にはまだ三万人以上の兵と一年分の物資があるにもかかわらず、ついに城を出て降服します。

ここまで流浪るろうを繰り返した劉備は、このとき初老しよらうの五十三歳。二十代で関羽、張飛と義兄弟の契りを結んで、すでに三十年。ついに劉備は、物産に恵まれた蜀を手に入れ、自身の揺るぎない地盤を築くことができました。諸葛亮の「天下三分の計」は、その実現に向けて大きく前進しました。